東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2008 年 8 月 8 日

最後の審判の日 -2-

先週のフトバでは、熱力学の法則もまた、世界の最後の日が訪れることを示しているということを説明し、その例を紹介しました。今日は、復活の日についての様々な状況をクルアーンからさらに紹介していきます。包み隠す章第１節では次のように述べられています。「太陽が包み隠される時」ここで出てくる「包み隠す」という動詞は、ターバンを頭に巻く時にも使われますが、つ巻く、筒状に丸める、たたむ、縮めるというような意味をも持ちます。この章句では、世界の終わりの日についての説き明かしの中で、太陽がどのように最後の日を迎えるのかを示しているのです。太陽は水素原子を燃焼させエネルギーを得て、熱と温度を発しています。水素がヘリウムになる過程は、水素原子がなくなることによって止まり、そしてそれは死を迎えるのです。仮に影響を及ぼす他の要素がなかったとしても、太陽がこの要因のみによってすら、終わりを迎えることは確実なのです。「諸星が消される時」（送られるもの章第８節）

クルアーンが啓示された時代、人々は星の光が無限に続く性質を持っているものと考えていました。したがって、星の内部構造、そして星のエネルギーが限りあるものであることが知られていないこの時代に、クルアーンが星の存在が終焉を迎えるであろうことを告げているのは一つの奇跡です。星達は光の源であり、この章において星が消されることが言及されていることも重要です。

「諸星が散らされる時」（裂ける章第２節）

星達が消されることについての言及に続き、光を発しない惑星についてそれが散らされることを述べています。クルアーンは、星という　言葉はアラビア語で「ナジュム」とされていますが、惑星という語は「カウカブ」とされています。これらの星は中心となる星に従っており、その中心となる星が終わりを迎え光を失うと、それらもまた軌道から外れ、すなわち散らされてしまうのです。「様々な野獣が（恐怖の余り）群をなし集まる時」（包み隠す章第５節）

クルアーンは、終わりの日の大きな地震によって野獣達が一箇所に集まってくることを述べています。現代でも、地震の前や後の動物達の行動が学者達の関心を集めています。例えば、ある地震では、シアトルのウッドランド動物園の象達が奇妙な動作を行なっており、またゴリラ達がおりの中で転がりまわっていたことが確認されています。「その時、大地は大揺れに揺れる。」（出来事章第４節）

クルアーンでの復活の日の過程についての全ての説明は、その過程において、まず地上で大地震が起こることを示しています。クルアーンは、この揺れが非常に激しいものであることを明白に示しています。山を砕いて崩すこの揺れが、人々を大きなパニックに陥れることをクルアーンは説いています。

「大地が延べ広げられ、その中のものを吐き出して空になり」（割れる章第３－４節）

この章句は、大地の中のものが外に吐き出されることを示しています。これは、多くの場所でマグマが地震によって噴出することを示唆するものでしょう。

「大洋が沸きたち、溢れる時」（包み隠す章第６節）

海底で噴出したマグマは海水を沸き立たせ、溢れさせるでしょう。その生涯においておそらく全く地震を経験したことのない預言者ムハンマドが、（もし仮に地震を体験していたとしても）強い地震でマグマが噴出し海を沸き立たせることを知ることができた可能性はないのです。

「かれら(にせ信者)は、その時（最後の審判）を待つほかはない。それは突然かれらに下る。その兆候はすでに下っている。それ（時）が来たとき、かれらは警告をどう役立てるのか。」（ムハンマド章第１８節）

「本当に、（審判の）時はやって来る。それに就いて疑いの余地はない。本当にアッラーは、墓の中の者を甦らされるのである。」（巡礼章第７節）

クルアーンは、人がその理性を、大地が直面するであろう最も激しい出来事へと向けることを求めているのです。

クルアーンが啓示された時代に生きていたイスラーム教徒達は、ここで述べた全てのことを、科学的にあり得ると判断したからではなく、世界を創造されたアッラーが全てを無とされることがどれほど容易なことか把握できたからこそ信じたのです。

アッラーが私達を最後の審判の日の恐怖から安全である信者達の中に入れて下さいますように。